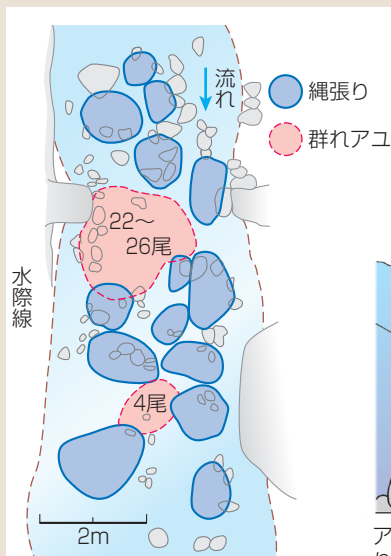


参考 アユの縄張りと友釣り

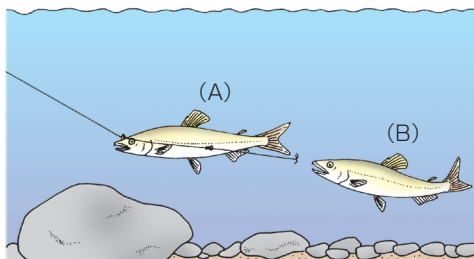
縄張りをもつ生物の例として、アユが知られている。稚魚の時期には海で生活し、川をさかのぼりながら成長して、中流域に定着したアユは、川底の石に付着した藻類(⇒ p.371)を食べるようになる。このとき、アユは、川の瀬に1匹ずつ「はみ場」とよばれる縄張り(採食縄張り)をつくり、その中の藻類を独占する。しかし、川全体のアユの密度が高くなると、縄張りは消えてしまう。縄張りに侵入

5



するアユがふえると、それらを追い払うのに時間とられ、縄張りをもっているのに十分に食物をとることができなくなるからである。日本で行われる「アユの友釣り」は、この縄張りをつくる性質を利用している。

10



アユの友釣りは、縄張りをつくる性質を利用した釣り方である。縄張りアユ(B)は、侵入してきたおとりのアユ(A)を攻撃しようとして、針にかかる。

▲図 a アユの縄張り(左)と友釣り(右)

●つがい関係● 個々の生物に見られるさまざまな形態的・生態的特徴は、結果的に、自らの子孫を可能な限りふやすことにつながっている。

多くの動物において、雄は、精子という比較的小さな配偶子を多量に生産できるため、多くの雌と交尾することが可能である。一方、雌は、卵という大きい配偶子を限りある数しかつけれない。生み出した卵や子どもの世話を

15